

令和 元年 6 月 3 日現在

機関番号：12602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370201

研究課題名(和文)『懐風藻』諸伝本および本文に関する研究

研究課題名(英文)The Study on the traditional texts of "Kaifuso"

研究代表者

土佐 朋子 (TOSA, TOMOKO)

東京医科歯科大学・教養部・准教授

研究者番号：00390427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：『懐風藻』の伝本に関する調査を行い、江戸期の詞華集および史書に引用された『懐風藻』本文、版本の書入内容、江戸末期成立の『懐風藻箋註』も含めて総合的に考察してきた。その結果、一つの祖本から、書写の過程で複数の異なる系統が生み出される過程と、それらが屋代弘賢校本を介して群書類従懐風藻で合流し、新しい特異な複合本文が編集される過程とを明らかにした。また、本文研究で得られた知見に基づき、「懐風藻校本」を作成し、連載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで『懐風藻』本文については、昭和32年に大野保氏が作成した校本を参照するしかなかった。本研究によって、それ以降に発見された本文、および本研究期間内に新たに発見した本文も加え、さらに江戸期の史書および詞華集に引用された『懐風藻』本文、版本書入の本文情報をも掲載した「懐風藻校本」を公開した。そのことにより、精度の高い本文考証と、信頼性の高い本文に基づく作品研究とが可能になるという学術的意義がある。そして、それは日本文学・文化の形成過程の一端を明らかにすることにつながるという社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：I investigated into the traditional text of "Kaifuso", the "Kaifuso" text quoted to an anthology of Edo period and a history books, insertion contents of the printed book, and the text which "Kaifuso sentyu" had edited. As a result, it was found the process that plural of different texts had been made, and through the variorum made by Yashiro Hirokata, the new text had been made on "Gunsho-ruijyu". Also I made "Kaifuso kohon" based on the knowledge that this study provided.

研究分野：日本上代文学

キーワード：『懐風藻』 写本・版本 本文系統 『懐風藻箋註』 懐風藻校本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『懷風藻』の伝本・本文については、大野保『懷風藻の研究』校異篇(三省堂、昭和32年)、小島憲之『岩波古典文学大系 懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(昭和39年)、田村謙治『懷風藻の基礎的研究(諸本について)』(『城南紀要』6号、昭和45年)、足立尚計『懷風藻の諸本』(『皇學館史学』創刊号、昭和61年3月)、沖光正『懷風藻の書写本』(辰巳正明編『懷風藻 漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院、平成12年)らの成果によって、23本の写本の存在が明らかになっていた。

その後、本報告者は、平成22~25年度科研費(若手研究B22720079)の交付を受け、新たに12本の写本を発見・調査し、それまでに発見されていた23本の写本についても閲覧可能なものは改めて調査を行い、それらの本文を収集して、比較検討を行った。同時に、江戸期の版本書入の内容や、史書および詞華集収載の『懷風藻』本文についても検証対象とした。その結果、群書類従『懷風藻』の本文は、屋代弘賢校本を介して、江戸期に存在した複数の本文が合流して新たに生み出された複合本文であることが明らかとなり、それまでの群書類従系と非群書類従系に大別する考え方は改められる必要があることがわかった。『懷風藻』の適切な本文考証のためには、群書類従懷風藻で合流するより前の本文一つ一つの性格と系統が明らかにされなければならない。

しかし、この時点では、収集した本文一つ一つの精査は済んでおらず、『懷風藻校本』の作成にも至っていなかった。最善本文の決定に必要な本文情報を公開できる状況にはなかった。

『懷風藻』には文字が確定できない箇所が少なからず存在する。『懷風藻』は、天和版本が20か所を超える墨格を含み持ったまま刊行されており、また比較的古態を残していると思われる本文には判読不能な形に崩れている文字が散見される。そのような箇所を中心として、確定ができない本文や疑わしい本文が少なからず存在する。それらについては、いまだに最善の本文が確定できないまま、小島大系の採用本文や群書類従懷風藻の本文が、今なお無批判に踏襲される傾向にある。その理由は、本文一つ一つの性格と系統が明らかにされず、最善の本文を決定するために必要な本文情報を得ることが困難な状況にあったためである。

また、『懷風藻』はすでに江戸期には書入の形で、簡便ではあるが語彙に関する注釈・考証が施されている。また、江戸末期には現存では最古となる注釈書『懷風藻箋註』が作成されている。これまで、これら江戸期の成果は、ほとんど顧みられることがなく、現代の研究にほとんど活かされてこなかったといっても過言ではない。平成23年の辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院)には『懷風藻箋註』が引用されているが、断片的なものにとどまり、間接的にしか知りえないことから、客観的な検証が不可能である。このような状況にとどまっている理由は、これら江戸期の書入や注釈書の存在が広く知られることもなく、かつ自筆本によってしか参照できないため、参看されにくい状態であったためである。

研究開始当初においては、このように、新たな伝本も含めて35本の写本の存在が確認されてはいたものの、それらを『懷風藻』研究に活かすことのできる状況にはなかった。また、江戸期の書写・受容の過程で新たな本文が生み出され、書入も施されてきている『懷風藻』においては、それら江戸期の考証の跡をたどることが必要であるにもかかわらず、それが可能な状況にはなかった。

このような状況を背景として、これまで現存が確認されてきた本文に基づく新しい「校本」を作成し、かつ江戸期の書入や注釈書を誰もが参看できる状態にして、最善本文を確定するのに必要な資料として公開することにより、適切な本文に基づく作品研究を可能にしたいと考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

現存が確認された『懷風藻』本文について、一つ一つの性格と系統を明らかにし、「校本」を作成する。また、江戸期版本への書入内容や、注釈書の内容を明らかにする。そうすることにより、最善本文の確定を可能にし、適切な本文に基づいた作品研究を可能にすることが目的である。

3. 研究の方法

- (1) 所蔵機関における『懷風藻』伝本の調査。まだ調査ができていない伝本、本文考証の過程で新たに調査の必要が生じた伝本に関して、所蔵機関で閲覧・調査を行う。書誌データをとり、本文を収集する。
- (2) 収集した本文を整理し、比較対照させる。
- (3) (1)(2)に基づいて、「校本」を作成する。
- (4) 主たる江戸期詞華集、すなわち『本朝一人一首』『本朝詩英』『歴朝詩纂』『日本詩紀』掲載の『懷風藻』本文を収集、整理し、『懷風藻』伝本と比較対照させる。『日本詩紀』は木活字本、浄書本、若林友堯増訂本にわけて、それぞれ比較対照させる。
- (5) 収集してきた『懷風藻』版本への書入を翻刻、公開する。本文に関する書入については、「校本」に掲載する本文情報として整理する。
- (6) 『懷風藻箋註』は、平成23年に雑誌に公開したものを土台として、改めて適切な形に整える。さらに、『箋註』の作者、本文の性格、歴史的意義などに関する考察を進め、江戸末期に日本漢詩文集『懷風藻』に対して、漢籍に基づく注釈が行われた文化・学

問的背景を明らかにする。

- (7) 以上(1)～(6)の調査と考察に基づき、底本にふさわしい本文を定め、他本と校合し、『懐風藻校本』を作成する。『校本』には、詞華集や版本書入などの本文情報も「参考」として掲載する。

4. 研究成果

『懐風藻』は古写本にめぐまれない。今回の調査においても、江戸期を遡る写本は見出すに至らなかった。現存写本は今のところ 35 本確認され、すべて江戸期以降のものと思われる。江戸初期には古写本が残存していたと推測され、江戸期にそれが書写され、伝来する過程で新たな本文が生み出され、系統が分かれることになった。版本は、無刊記本・天和4年・宝永2年・寛政5年版が刊行されており、天和4年版には20箇所あまりの墨格があり、宝永2年で数箇所を除いて多くの箇所に文字が補われ、頭注が施された。寛政5年版では、そこに若干の校異が施された。天和から寛政までの間に、文字が改訂されている箇所も散見される。

現存写本・版本はほぼすべて「長久二年惟宗孝言奥書」と「康永元年奥書」を有していることから、惟宗孝言によって書写され、後白河法皇の蓮華王院宝蔵に所蔵された本文を「祖本」とすると見られる。江戸初期に存在したであろう古写本は当然、その本文を伝えるものであったはずである。

その古写本が、江戸期の享受・伝来の過程で異なる系統に分かれていく。「祖本」がほぼ同一であることもあり、本文系統はくっきりと分かれるものではなく、グラデーションのように広がっている。その中で、A 広橋本 = 伊達本、B 榊原本 = 松平本、C 田中本 = 川口本、C' 塩竈本 = 遼寧本 = 昌平坂本は、それぞれ直接的あるいは間接的に同一の本文を転写したのと考えてよいと思われる。

A は、広橋家旧蔵本と伊達家旧蔵本であり、伝来した場の性格は異なるが、筆跡まで酷似したほぼ同一本文である。これに比較的近い本文を伝えるのが、彰考館本、屋代校本の本文、陽春廬本、脇坂本、鍋島本である。しかし、それぞれに異なる点も持っており、完全に同系統と見なすことはできない。

B の旧蔵者、榊原忠次と松平忠房は江戸初期の「文人大名」として名高い。書籍収蔵家としても知られる二人は、ともに林家を中心とした学術的交流グループの一員であった。これと近い本文を伝えるのが、尾州徳川家旧蔵の尾州本である。尾州本から榊原本・松平本へという継承を想定してよいと思われる。

C と C' は、林家系統の諸本である。この C と C' には、ほかの懐風藻伝本とは異なる独自の文字を有する箇所が散見されるという特徴がある。さらに、林家で編纂された詩華集や史書に引用された本文と、C・C' の本文の間にも一致しない箇所が散見される。林家では、その都度、漢詩文あるいは歴史編述の表現として最も適切と考える本文に書き換えながら、書写や編集が行われたのではないかと推測される。C と C' の間には明らかな異同が確認されるが、これも書写時の判読と解釈の相違によって生じたものではないかと思われる。

このほかに、ABC いずれの要素も含み持つ来歴志本、慈溪本、おおよそ版本と同一本文だが部分的に C' の要素が見られる前田本もある。

『懐風藻』が開板されるのは天和4年である。

天和4年版本の本文は、江戸初期に存在したであろう古写本の本文を、山脇道円が整除したものではないかと思われる。A と B が交じり合ったような本文であり、20 箇所あまりの欠字箇所を含み持つことが大きな特徴でもある。天和4年の開板は比較的早い時期ではないかと思われるが、これほど多くの文字の欠落を抱えたまま刊行されたのには、どのような事情があったのだろうか。一つには、山脇道円の周辺に存在した古写本が、それだけ状態の悪いものであり、到底文字が補えるようなものではなかったという推定が可能であるが、それでもなお欠字のままで刊行に踏み切ったその背景は気になるところである。

この天和4年版本刊行以降は、その多くの墨格を補い、できるだけ完全なものにしようと試みた本文と、完全な転写本とに大別される。宝永2年版本と寛政5年版本が、天和4年版本の欠落などを補うことを目的としていることは言うまでもない。転写本には、酒折本、内山本、青木本、広大本、岩瀬本、狩野本、米山本(以上天和版本)、河野本、土佐本(以上宝永版本)、明石本、懐徳堂本(以上寛政版本)がある。このほか、基本的には版本の転写本だが注意されるものとして、徳富本と佐藤本がある。徳富本は天和版本とほぼ同じ本文だが、ところどころに独自の文字を持つ箇所があり、佐藤本は宝永版本を転写している可能性が高いが、独自に校訂している箇所が確認される。

天和版本に関係する伝本として、かなり注意を要するものに「白雲書庫本懐風藻」があげられる。この伝本の存在は確認されておらず、屋代校本、養月齋本、佐々木長卿書入本の識語にのみ確認される伝本名である。「白雲書庫」という名称は野間三竹の蔵書を指し、その現存目録にも「懐風藻」の書名は記載されていることから、野間三竹が『懐風藻』を所蔵していたことは明らかである。しかし、この「白雲書庫本懐風藻」は、三竹所蔵の『懐風藻』ではない。

屋代校本、養月齋本、佐々木書入本がそろって引用する「白雲書庫本懐風藻」の「奥書(元禄17年)」は、「三条西実隆本」に基づく正統な本文だと主張している。しかしながら、本文を復元してみると、天和4年版本とほぼ同一であり、天和本の20箇所あまりの墨格に限定的に特異な文字が現れ、かつ道融詩2首(無題詩・山中詩)と亡名氏「歎老詩」を持つ本文であ

ることがわかる。「白雲書庫本懐風藻」なる伝本は、天和4年の墨格に文字を入れ、詩の全体数に整合性を持たせようとして詩を補い、「三条西実隆」という権威付けをして、三竹死没後の元禄17年に「創作」されたものであったと見るべきである。

三竹が所蔵した『懐風藻』は、『本朝詩英』編集にも用いられたはずであるが、現存は確認されていない。『詩英』は先行する詩華集『一人一首』を参照しているが、『一人一首』と異なる本文を採用する箇所も散見され、それらは三竹所蔵本に基づく本文ではないかと推定される。また、それらの箇所と鍋島本との一致度が高いことから、晩年の三竹と深く交流した鍋島直條によって、三竹所蔵『懐風藻』の本文は鍋島本に受け継がれた可能性が高いと思われる。

さて、この元禄17年に出現したと見られる「白雲書庫本懐風藻」の存在を看過することができないのは、その本文が群書類従懐風藻に流れ込み、流布本文の一つとして、現在も比較的無批判に用いられているからなのである。

群書類従懐風藻は屋代弘賢校本と那佐勝皇本とを用いて編集されている。屋代弘賢本は、Aの系統に近い伝本を本文に据え、天和4年版本、C塩竈本、「白雲書庫本懐風藻」で校合されている。本文を仔細に見ていくと、明らかにこれら4種類の本文とは異なる文字を書き入れている箇所も確認されることから、ほかにも複数の本文を参看している可能性が高い。

屋代弘賢の校合作業を、現代の文献学の尺度で測ることはできない。弘賢が可能な限り多くの本文情報を収集したのは間違いない。『懐風藻』本文の来歴を明らかにすべく、多くの本文情報を収集し、比較検討している。しかし、校異として採り上げるか否かは、あくまでも弘賢自身の見識にゆだねられており、近代以降の文献学的知見に基づいて判断されたものではないからである。弘賢が見識だったのではない。弘賢の校合作業は、文献学的ではなく、考証学的なのである。当時の最先端の「科学」によって作成されたのが弘賢校本である。だからこそ、塙保己一は全面的に信頼を置いて、主たる資料として活用したのであろう。群書類従懐風藻は、弘賢校本の校合書入をほぼ全面的に支持し、採用して本文を編集した。その結果、複数の本文の交じり合った複合本文が生み出されたのである。元禄17年に出来た「白雲書庫本懐風藻」も、その複合本文の一部に取り込まれることになったのである。

懐風藻諸伝本の本文は、ほぼ一つの祖本から系統が分岐しているため、異同箇所も文字の形が似通っている場合が通例である。しかし、「白雲書庫本懐風藻」は天和本の墨格だけを見て文字を補ったために、それらとはかけ離れた特異な本文を持つことになった。懐風藻の諸伝本の系統がグラデーションのように広がるのに対し、そこから一つ無関係に外れるのが「白雲書庫本懐風藻」である。

その顕著な例として、他の諸本が持たない3首（道融2首、亡名氏1首）がある。この3首については、すでに先学によって、後世の人間による付加である可能性が論じられてきたが、そのことは文献学的にも裏付けられることができ、かつ「後世」は「元禄17年」まで下る可能性が大きいことが、本研究によって明らかになった。この3首は、『懐風藻』成立時にはなかったものであり、元禄17年の「白雲書庫本懐風藻」とともに出現する本文なのである。そのほかにも群書類従懐風藻本文には、弘賢が書き取ったために本文化されたが、文献学的には正統とは言いがたいものも少なくない。特に、群書類従懐風藻独自の本文については、無批判に用いるのではなく、それが何に由来するものなのかを検討する必要がある。

『懐風藻』本文に対して、弘賢とよく似た方法で校合・編集作業を行ったのが今井舎人こと鈴木真年である。真年は系譜学者として知られているが、領域横断的にあらゆる資料を収集し、それらを比較的パラレルに扱い、物事の来歴を見極めようとするその意識と方法は、考証学的といえる。真年の『懐風藻』研究の成果は、『懐風藻箋註』にまとめられている。主として群書類従懐風藻、C田中本、天和あるいは寛政版本を用いて、本文を編集している。近代以降の文献学の常識とは異なり、原本に忠実なものを最善とする意識は見られない。最新の成果である群書類従懐風藻、それに準じる版本、そして林家伝来の1本によって、自らが最善と考える本文を編集している。校異についても、自らが必要と考える箇所、本文に採用した文字とは違う可能性があると考えた箇所のみ施したと見られる。真年も弘賢と同様、考証学という当時の最先端の「科学」によって『懐風藻』本文を考証しているのである。

『箋註』は、日本漢詩文に対して漢籍を用いて注釈したという点においても画期的であった。鈴木真年は、平田篤胤・鉄胤、栗原信充に師事し、国学・漢学・有職故実など幅広い学問体系と考証学的な手法を身につけることになった考証家である。その知的環境の中から生み出されたのが『箋註』だったといえる。静嘉堂文庫に自筆稿本が遺されているのみであったため、参照しにくかった『箋註』を、全文翻刻を刊行して容易に参照できるようにしたことも、本研究の成果の一つである。

以上のような成果を踏まえ、「懐風藻校本」を作成、連載した。底本には、Bに属する榊原本（天理大学附属天理図書館蔵）を用いた。34本の写本と版本3種、群書類従版本を用いて校合し、「参考」として『箋註』『本朝一人一首』『本朝詩英』『歴朝詩纂』『日本詩紀』（木活字本・浄書本・若林友堯増訂本）の本文情報、および主要な江戸期版本書入内容も必要に応じて掲載している。連載は、2018年10月で完了し、現在、増補改訂し、解題などを付してまとめるべく作業中である。

〔雑誌論文〕(計 21 件)

- 1 土佐朋子「林読耕斎撰『本朝三十六詩仙』について」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』12号、査読無、2019年3月、139~157ページ)
- 2 土佐朋子「四庫全書所収『高氏三宴詩集』の資料的性格」(『中国文学研究』44期、査読有、2018年12月、43~59ページ)
- 3 土佐朋子「懐風藻校本 本文篇四」(『古代中世文学論考』37集、査読無、2018年10月、34~135ページ)
- 4 土佐朋子「藤原宇合「秋日於左僕射長王宅宴」詩の論—藤原宇合の「反招隠詩」—」(『国文学研究』186号、2018年10月、査読有、1~12ページ)
- 5 土佐朋子「懐風藻校本 本文篇三」(『古代中世文学論考』36集、査読無、新典社、2018年3月、36~88ページ)
- 6 土佐朋子「懐風藻校本 本文篇二」(『古代中世文学論考』35集、査読無、新典社、2017年10月、5~95ページ)
- 7 土佐朋子「紀古麻呂「望雪詩」の論—理想の天子論—」(『国語国文』86巻9号、査読有、2017年9月、34~49ページ)
- 8 土佐朋子「懐風藻校本 本文篇一」(『古代中世文学論考』34集、査読無、新典社、2017年5月、99~184ページ)
- 9 土佐朋子「伝承される「臨刑詩」—稗史の想像力—」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』47号、査読無、2017年3月、1~17ページ)
- 10 土佐朋子「懐風藻欠字誤字考証(一)」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』10号、査読無、2017年3月、32~42ページ)
- 11 土佐朋子「『白雲書庫本懐風藻』の本文とその性格」(『古代中世文学論考』33集、査読無、新典社、2016年8月、114~162ページ)
- 12 土佐朋子「懐風藻校本 序文篇」(『早稲田大学日本古典籍年報』9号、査読無、2016年3月、73~81ページ)
- 13 土佐朋子「『本朝詩英』懐風藻本文の性格—『一人一首』の継承と鍋島本系統本文に基づく改変—」(『古代研究』49号、査読無、2016年2月、1~13ページ)
- 14 土佐朋子「今井舎人と鈴木真年—鈴木真年伝の新資料—」(『汲古』68号、査読有、2015年12月、7~12ページ)
- 15 土佐朋子「狩谷えき斎書入『懐風藻』—川瀬一馬著『懐風藻校注』修正—」(『水門』26号、査読有、2015年10月、26~96ページ)
- 16 土佐朋子「藤原宇合「悲不遇」詩の論—藤原宇合の賢者論—」(『國學院雑誌』116巻1号、査読有、2015年1月、129~143ページ)
- 17 土佐朋子「『本朝編年録』『本朝通鑑』と『懐風藻』」(『古代中世文学論考』30集、査読無、新典社、2014年10月、30~61ページ)

〔図書〕(計 1 件)

- 1 土佐朋子『静嘉堂文庫蔵『懐風藻箋註』本文と研究』(汲古書院、2018年、総ページ数404)

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。